

特63

328
固
館

柳 高 松 神 揚 登 八
八 七 六 五 四 三 二 一

藝壇三百人評

次

- 龍齋貞山 一
- 亭左樂 二
- 田實 三
- 川家妻吉 四
- 田伯山 四
- 羽家銀二 四
- 家岩藏 五
- 花樓馬樂 六

明治

40 2 25

内交

目次

九	澤村源之助	七
一〇	つるが若辰	八
一一	中村 吉右衛門	八
一二	藤井 六輔	九
一三	水野 好美	一〇
一四	伊東 陵潮	一一
一五	岸の家 仲太夫	一二
一六	竹本朝太夫	一三
一七	中村 時藏	一三
一八	翁家さん馬	一四
一九	曾我の家 五郎	一五

目次

二〇	竹本昇之助	一五
二一	桶家 圓藏	一六
二二	澤村源之丞	一七
二三	桂 文治	一八
二四	竹本 殿母太夫	一八
二五	邑井 貞吉	一九
二六	澤村 訥子	二〇
二七	柳 亭燕枝	二〇
二八	佐藤 歳三	二二
二九	濤清舍 千山	二三
三〇	伊井 蓉峯	二三

目次

三一	富士松加賀太夫……………	三
三二	三遊亭圓遊……………	四
三三	中村芝翫……………	五
三四	むさし家嘉市……………	五
三五	ジョンペール……………	六
三六	一立齋文車……………	六
三七	竹本朝重……………	七
三八	中村又五郎……………	八
三九	桂文樂……………	九
四〇	兒島文術……………	一〇
四一	芳村伊十郎……………	一〇

目次

四二	揚名舍桃李……………	一
四三	尾上松助……………	二
四四	柳川一蝶齋……………	三
四五	松旭齋天一……………	三
四六	中村芝鶴……………	三
四七	木下吉之助……………	三
四八	入船亭扇橋……………	四
四九	一龍齋貞輔……………	四
五〇	橘家圓喬……………	五
五一	中村獅磨右衛門……………	五
五二	三遊亭福遊三……………	六

次 目

五三	國井 吉右衛門	三六
五四	柳家小三治	三九
五五	藤澤淺二郎	三九
五六	市川左團次	四〇
五七	正流齋南窓	四二
五八	柳家小さん	四二
五九	市川八百藏	四三
六〇	竹本祖太夫	四三
六一	大和家寶樂	四四
六二	中野 信近	四五
六三	松 永和 楓	四五

次 目

六四	三遊亭 小遊三	四六
六五	清草舍英昌	四六
六六	市川高麗藏	四七
六七	昇龍齋貞丈	四七
六八	春風亭柳朝	四八
六九	柴田善太郎	四九
七〇	市川久米八	四九
七一	三遊亭 小傳遊	五〇
七二	猫遊軒伯知	五一
七三	石 田 信 夫	五一
七四	かつばれ 金九	五二

目次

七五	雷門助平	五二
七六	深澤恒造	五三
七七	西尾麟慶	五三
七八	市川新十郎	五四
七九	三遊亭圓右	五五
八〇	井上正夫	五五
八一	一立齋文慶	五五
八二	中村梅雀	五七
八三	三遊亭圓左	五七
八四	河合武雄	五八
八五	秦々齋桃葉	五八

目次

八六	雷門助六	五九
八七	福島清	五九
八八	澤村訥升	六〇
八九	伊藤痴遊	六〇
九〇	安樂齋梅八	六一
九一	鶴家團十郎	六一
九二	市川團藏	六二
九三	尾上蟹十郎	六三
九四	山本嘉一	六三
九五	角藤定憲	六三
九六	竹本昇太夫	六四

目次

九七	正流齋鶴窓	六
九八	柳家小せん	五
九九	川上貞奴	六
一〇〇	歸天齋 小正一	六
一〇一	市村 羽左衛門	七
一〇二	寶井 琴馬	六
一〇三	市川 紅若	六
一〇四	桃木吉之助	六
一〇五	松尾 龍	七
一〇六	猫遊軒 小伯知	七
一〇七	市川小團次	七

目次

一〇八	橋ハンステ	七
一〇九	立川 談志	七
一一〇	川上音次郎	七
一一一	一龍齋貞昌	七
一一二	三遊亭 しう雀	七
一一三	竹本 小清	七
一一四	富士松柴朝	七
一一五	入船家米藏	七
一一六	志村松之助	七
一一七	桃川 若燕	七
一一八	村田 正雄	六

目次

一一九	鏡味龜吉	七九
一二〇	市川團八	八〇
一二一	富士松 ぎん蝶	八〇
一二二	關 花 助	八一
一二三	春風亭柳枝	八一
一二四	橘家圓三	八二
一二五	境 若 狹	八二
一二六	松林右圓	八三
一二七	朝寝坊 むらく	八三
一二八	一心亭辰雄	八四
一二九	桂 殘 月	八四

目次

一三〇	木村 操	八五
一三一	三遊亭金馬	八五
一三二	寶井琴窓	八六
一三三	尾上菊五郎	八六
一三四	竹本 越 壽	八七
一三五	古今亭今輔	八八
一三六	橘家橘之助	八九
一三七	市川 女 寅	九〇
一三八	アラック	九〇
一三九	常盤津 千代香	九一
一四〇	木村 周 平	九一

目次

一四一	名古屋 三人女	九二
一四二	放牛舍 桃林	九二
一四三	騎江亭 芝樂	九三
一四四	大谷馬十	九三
一四五	藤川岩之助	九四
一四六	寶井琴凌	九四
一四七	三遊亭遊三	九五
一四八	春錦亭柳櫻	九五
一四九	尾上梅丸	九六
一五〇	市川猿之助	九六
一五一	田邊大龍	九七

目次

一五二	春風亭枝雀	九八
一五三	五味國太郎	九八
一五四	養老瀧五郎	九八
一五五	壽家泰治	九八
一五六	一柳齋柳一	九九
一五七	尾上菊三郎	九九
一五八	三遊亭金朝	一〇一
一五九	森操	一〇一
一六〇	松林伯圓	一〇一
一六一	竹本文福	一〇三
一六二	桂小南	一〇三

目次

一六三	三遊亭 小圓朝	一〇四
一六四	神田 松 鯉	一〇五
一六五	常盤津 都太夫	一〇五
一六六	市川 團 升	一〇六
一六七	松廼家 喜作	一〇六
一六八	三遊亭遊左衛門	一〇七
一六九	澤村 宗之助	一〇八
一七〇	神田 小伯山	一〇九
一七一	松柳亭 鶴枝	一〇九
一七二	中村 蝶 昇	一一〇
一七三	華 五 川	一一〇

目次

一七四	小金井 蘆洲	一一一
一七五	中村 秋 孝	一一三
一七六	市川 團 治	一一三
一七七	越後源次郎	一一三
一七八	都々逸坊 扇歌	一一三
一七九	寶井 琴 柳	一一四
一八〇	春風亭 米枝	一一五
一八一	三遊亭 市馬	一一五
一八二	吉澤 美之助	一一六
一八三	猫遊軒 若圓	一一七
一八四	都 樂 文 男	一一七

目次

一八五	有村謹吾	二一六
一八六	橘家小圓喬	二一六
一八七	尾上菊四郎	二一九
一八八	太神樂 九める	二一九
一八九	市川桃吉	二二〇
一九〇	三遊亭圓樂	二二一
一九一	一龍齋貞橘	二二二
一九二	三遊亭 圓治郎	二二三
一九三	山口定雄	二二三
一九四	桃川如燕	二二四
一九五	岩井竹松	二二四

目次

一九六	松井源水	二二五
一九七	春風亭柳條	二二五
一九八	阪東 家壽之助	二二六
一九九	尾上梅幸	二二七
二〇〇	一立齋文山	二二七
二〇一	尾上幸之助	二二八
二〇二	川上秋月	二二八
二〇三	尾上榮三郎	二二九
二〇四	雷門金賀	二二九
二〇五	田邊南龍	二三〇
二〇六	中村福之助	二三一

次	目	
二〇七	倭露吞	二三
二〇八	福井茂兵衛	二三
二〇九	市川猿之丞	二三
二一〇	橘家圓左衛門	二三
二一一	邑井一	二四
二一二	女道樂連	二四
二一三	吉川清之助	二六
二一四	中村巖次郎	二七
二一五	三遊亭遊雀	二七
二一六	清元菊之助	二八
二一七	松本錦糸	二八

次	目	
二一八	柳亭燕路	二九
二一九	三田八改×勘彌	二九
二二〇	旭堂立志	二九
二二一	中村芝若	四〇
二二二	小織桂一郎	四二
二二三	中村芝三松	四二
二二四	服部谷川	四二
二二五	雷門小助六	四三
二二六	地天齋貞一	四三
二二七	竹本小土佐	四三
二二八	狂訓亭爲永	四四

次	目	
二三九	中村銀之助	一四五
二三〇	高松琴哉	一四五
二三一	柳亭燕橋	一四五
二三二	竹本大島太夫	一四六
二三三	市川米花	一四六
二三四	高田亘	一四六
二三五	橘家三好	一四七
二三六	神田伯鱗	一四七
二三七	磯野平二郎	一四七
二三八	豆假名太夫	一四七
二三九	中村明石	一四七

次	目	
二四〇	大島伯鶴	一五〇
二四一	市川千升	一五〇
二四二	橘家圓太郎	一五〇
二四三	市川三八	一五一
二四四	竹本愛子	一五一
二四五	三遊亭好三	一五二
二四六	實川延子	一五三
二四七	都家歌六	一五三
二四八	市川栗三郎	一五四
二四九	三遊亭一圓遊	一五四
二五〇	真龍齋貞鏡	一五五

次	目	
二五一	三友亭紋彌	一五
二五二	市川猿十郎	一五
二五三	大和家 九にし	一五
二五四	五明樓玉輔	一五
二五五	市川荒次郎	一五
二五六	大谷 新	一五
二五七	阪東 三津五郎	一六〇
二五八	三遊亭新橘	一六〇
二五九	桃川 燕來	一六一
二六〇	阪東 秀調	一六一
二六一	橘家 萬橘	一六一

次	目	
二六二	中村 成若	一六二
二六三	中村 翫太郎	一六二
二六四	澁川 鯉橋	一六三
二六五	尾上 芙蓉	一六三
二六六	川崎 猛夫	一六四
二六七	三遊亭 三五	一六四
二六八	鏡味 幸太郎	一六五
二六九	青木 千八郎	一六五
二七〇	三遊亭 福圓遊	一六五
二七一	竹本 鶴吉	一六六
二七二	菊地 武成	一六六

目次

二七三	大隈柳玉	二七三
二七四	壽家惠太郎	二七四
二七五	丸山操	二七五
二七六	澤村紀久八	二七六
二七七	春風亭錦枝	二七六
二七八	一睡軒花堂	二七六
二七九	竹本伊達太夫	二七六
二八〇	東長次郎	二七六
二八一	倭輝久雄	二七六
二八二	市川九團次	二七六
二八三	春風亭年枝	二七六

天

目次

二八四	喜多村録郎	二八四
二八五	中村雁次郎	二八四
二八六	三遊亭遊樂	二八四
二八七	柴田南玉	二八四
二八八	三遊亭圓兵衛	二八四
二八九	市川蕙女	二八四
二九〇	市川左傳次	二八四
二九一	柳亭燕三	二八四
二九二	猫遊軒新伯知	二八四
二九三	市川鯉喜之助	二八四
二九四	富本半平	二八四

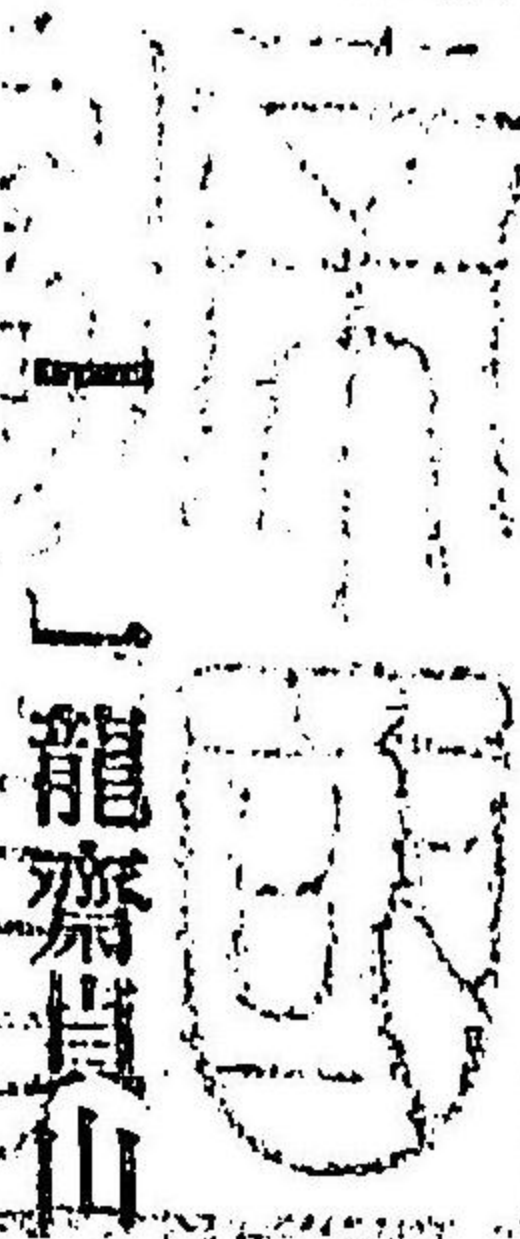
天

二九五	千歳	米坡	二七
二九六	三遊亭	小圓太	二六
二九七	中村	又藏	二六
二九八	若柳	燕嬢	二九
二九九	夕の家	二八〇
三〇〇	春風亭	朝枝	二八〇
以上				

三

藝壇三百人評目次終

藝壇三百人評



龍齋貴山

曉

紅

沈着にして痛快、眞面目にして滑脱、時代物の滋味、世話物の粹趣、陳腐に陥らず、當世に走らず、實に當代の名手なり。だが此人にして惜しむべきは、其眼のギョロリとしたるが、兎角張扇以外に事をたくらむで、爲に年がな釋界のこつた返し、

エ、先生天下取つても二合半ぢや無いか、何もさう大將たらんことを欲したがるぬものさ。

二 柳亭左樂

愚にもつかぬ仕方話しの親玉、今猶頭に毛の無きと八さんが櫛ぐられての怪しき笑ひ聲とを賣物にして天晴れの大看板面、まことに呆れたもの也、とやたらに蹴りつけるもの、彼の得意の話、松竹梅の三人が、ツラリと居並んだ禮席を見渡して、へドモドとした呼吸でなツたア、蛇になツたを

泣聲になつて繰り返す邊りは儘かに此人專賣の可笑味と云ふべしだ。

三 高田 實

ぬーツと出て、のそツと立ツて、ツカ／＼と引込むで満場は大喝采、唯もう豪ら相なお方也、これ器械入りの銅像か、非らず役者なり矣。

四 松川家妻吉

腕を斬られた先づ哀れ也、寄席へ出る又哀れ也、

藝のまづさ加減更に哀れ也。而して彼女の將來を
思へば愈々哀れ也。

五 神田伯山

小意氣な男前、濫い風采、何處迄も新聞氣の無い
大江戸ツ子、キビくタンカの切れる中に言ふ
に言はれぬ情味あり、實に青年釋師中得難き秀才
と云ふべし。

六 揚羽家銀二

一寸聲も鏗の有る意氣なもの、振事も北廓の喜作
式に派出にガツシリとして先づは結構なれど、取
廻しの生々騒々しきは御修業ものなり、夫れに拙
は下谷一番太鼓技でふる面するがあさまし、すさ
まじ。

七 壽家岩藏

公園名物の岩て阿兄い、すべてに少し突込み過
ぎる難はあれど、能く粹の粹意氣の意氣を心得て、
をかしくえぐり立てる處、梅坊主のやうに下品に

ならず、聊か氣骨も御座るチヨイと得難い男、さ
り乍ら寄席へ出るしる物では決して無い。

八 蝶花樓馬樂

變物で有名な本間彌太ツ平、向ふに敵無き面ツつ
き方に天下一品、研究會以來大いに社會臭い藝人
となつたが、金屏風の前へ袴を履いてかまえても
薄ら寒む相な格好、そこが此男の嬉れしがられる
處、併し此頃怪し氣な女と連立つて行くを見かけ
たり、大分金ができたなどと聞くと、些彌太ツ平

氣が薄くなつた様な氣がして口惜しい、ナニそね
めくか。

九 澤村源之助

紀の國やと云へば意氣な年増を聯想するほどに賣
込むた婀娜女形も、當時は暴を以て鳴る投げ出し
女形、此頃愈々おくやまの風が泌み切つて、立役
よしきたときは、もう、もう望み無し、チヨイ
トマア惜しいもんだネエー。

十 つるが若辰

樂らに浮うかせて、身みに泌しみさせて、其その婀娜なだな聲こゑツた
ら、春はる雨さめ降ふる日ひの小こ庇び髪がみの障しょう子じ越こしにでも聞きかさ
れたら、マアどんな凄すこいのがとたいでは消おれぬ氣き
がして來こ様さま、殊ことに其その得意とくいの後のちの泡あわ雪ゆき「ふたりが影かげ
の又またふたり、月つきにうつるを追お手てかと、身みをけし玉たま
の頬ほ冠かぶり」の邊あたりときたら、全まったく震ふるへ附つきたいネ。

十一 中村吉右衛門

音おん調てう活くわつ殺さつの自じ由ゆうは、高こ麗れい、羽う左ざ、ヨリ以上いじやうと云いつ
て過くわ言ごんで有あるまい、親おや父ぢの悪わるい癖くせもすツかり脱ぬ
けて、淺あさ草くさ座ざ時じ代だいの達たつ者しや小せう僧そうでなくなつたは申まを迄まで
も無なく、腹はらに堀ほり越こがひそんで居やる様やうな演やり口くちはえ
らい、併しかし思おもふ、歸きする所ところは矢やツ張はり普ふ通つう名な題だい役やく
者しやで終おるのでは有あるまいかと。

十二 藤井六輔

何なにしても困こまつたナツチヨコチヨイには相あ違ちが無なし、
だが、三ねん年た立たてば儘たかには三さんツにはなるもので、仕し

出し大勢の中へ出れば多少違ッて見へるも、魚屋
からたゝき上げた仕出し屋の故か、何は兎に角伊
井の腰にしがみついてはなれぬ所は、伊井もまた
可愛からう。

十三 水野好美

劍舞踊りは劍舞踊り也、玉乗りは玉乗り也、水野
好美は即ち水野好美也、珍世界の筋向ふで鳴らし
た名優也。

十四 伊東陵潮

氣障なハナ聲で時代物の芝居じみたのや、新聞物
の前世紀の壯俳じみた口調ときては、先代陵潮の
ハギレのした純江戸調に對して、あんまり呼吸が
違い過ぎるぢや無いか、夫れで時々色物の席へ交
ッてステ、コの見本を見せたり、川上の聲色を使
いたがったり、どこ迄臭いんだか境界がわからぬ
併しあの犬がなんもの割合に艶福家だとか、さらば
赤い緋袴も着づばなるまい。

十五 岸の家仲太夫

常磐津のネコになつたを日なたへ干して、賑やかな金藏の絲をかりて、精一ッばい若返りの、例の鼻の穴と唇の間から出る聲で大いさみ、併し流石捨てられぬ所も有る。

十六 竹本朝太夫

四角なふくれた真ッ黒な憎くてらしい顔、樂な婀娜ッポイ美しい聲、義太夫の土藏と新内の垣根と

十七 中村時藏

の間の道を成丈け新内の垣根の方へ寄つて、時々其垣根へ首を突込ひで、浮ついた年増を探すなど凄やのく、おかやと萬野のハナ明なんときた日にやア思はずブルくと震へますヨ、願くば置手に拭に白ッポイ唐棧の袷天か何かで高座へ上つてもらひ度いな、イヨ一日本一富士松朝太夫。

五月蠅く旨い、面白く臭い、演る方も草臥るだらうが見る方も草臥る、藝に假名を振つて見せる所

是等を眞の老練と云ふのだらう、亦捨て難き老優、遂に片市も逝く残り甚なこの頃、老寄のひや水して下さるな。

十八 翁家さん馬

えせ物識の高慢面、イヤニ眼を細くしてペジ〜と情も艶も無い舌まかせ、思切つて可厭な咄し家也、併し公園の便所をお役所と間違へる田舎者はえれへ咄し家様だとおツ魂消申べし、夫れに此節什ふ氣が狂ったか芝居掛りを見せると云ふ、これ

には東京者もえれへ咄し家様だとおツ魂消申べし

十九 曾我の家五郎

座頭の貫目が既に無い、口調に可笑味が薄い、洒落氣も新しかるだけ生意氣に聞こへる、新喜劇などのもの〜しく云はずとも俄は俄と名乗るが宜し、而して寶樂の粹、團九郎の妙を研究すべし、もうちツと磨き直してからやッて来い。

二十 竹本昇之助

矢張り義太夫唄ひの方、而して言葉にあまり働か
が有り過ぎ、身振りが巧み過ぎて、却つて情を缺
く、十歳で神童も古い文句だが、ソーレソレ。

廿一 橘家圓藏

確な腕には相違無い、あの長い顎をつき出してま
くしかけたら、到底太刀打の出来るものは有るま
い、殊に得意の八笑人の本讀みの邊り「火を一ッ
お貸し下され」「さ、おつけなされ」と敵役の濟
まし込むをふき出して「プツよーせやい」と交せ

ツ返しド、「やア汝は何の何某よな」の讀書調の
輕妙、後半の立廻りの眼付きなど、さては此人を
置いて他に求むべくもあらぬ、が併し何處迄もす
べての調子が安手で第一流とゆかぬはもう一ト呼
吸研究を要するわけだ。

二十二 澤村源之丞

身の輕さと替るのが早いのと、夫れ丈けの話し也、
白は煙りの如く、所作はぬるま湯の如く、役は忠
信以外何んにも出来ぬ氣なり。

二十三 桂 文治

名前許り立派で下手で困まつた、而して老い込む
だのは、氣の毒なものと云ふより外は無し、猫忠
信ももう鼻が痛し、重箱のふなぎもくさりやした。

二十四 竹本殿母太夫

此太夫の百度平内を再々聴くがお辻の老若が判ら
ぬに苦しむ、ソリヤ決して新造では無いことだけ
は解つて居るがね、夫れに彼の子供の御詠歌が

二十五 邑井貞吉

ヨンペールの都々一調などは器用と云ふも餘りあ
りだ、さう云へば顔も似てゐる。

吉彌時代の英氣は貞吉と成つて帳消しとなり、さ
て残つたる重荷を奈何せん、ナニ戀女房の東猿に
かつがせるかそれもよし、何は兎に角島田一
郎と藝者と書生の奇遇位いな處が眼目で晝場の眞
打はサト手ひとし、鬚が長いとて恐れ入る客許り
も有るまいでな。

二十六 澤村訥子

燒け銅式の名調子、彼の特長とするものへッピリ
の見得、棒香みの見得、實に得難い劇界の勇士哉
時に勇士先頭巽糸子とウヂヤヤケ以來少々元氣
消沈と見奉ったが如何、ナニ色男になるとおとな
しく成るものだとか、イヤ御馳走様。

二十七 柳亭燕枝

糞落着きに氣味の悪るい程片付けて、油ッこい調

二十八 佐藤歳三

子で、此後は明晩と、残り惜しがらせ様とするが
イヤどッこい、中橋の師匠どうもさうはゆかねへ
ヨ。
まだ役者をしてますとねえ、困った道樂者だナア
矢ッ張りあの肩もちやげのスーッ調子でよわッ
た男だナア、チイッ佐藤君、いッ迄其様な人困
まらせをして居すと、寄席へ出て詩吟でも賣った
方がキツト儲るせ。

二十九 濤清舍千山

枯れて骨の無い講釋、チホ、——を賣物にするい
ッそ罪の無い男、晝寝をさせ無い處は慥かに凡で
無いネ、チホ、——

三十 伊井蓉峰

熱心な研究と、負けず嫌いな氣質と、世間へ對す
る如才無いのとは、何うにか上手を以て迎へらる
迄になつて來た、モウ今日では確かに眞面目な

茶番では無い、唯手前惚れの強いのと、小刀でチ
ヨイ〜いたづらするのがいつ迄經つても直らぬ
に困つた。

三十一 富士松加賀太夫

廣く音曲界を見渡した處で、清元の延壽氣が揚が
らず、義太には當時品切也、常磐津に林中も去ッ
た今日、曲界に名人と呼びで指折る人先ツ一に此
人を以てするに憚らぬ、併し斯くの如き名人も新
内と云ふものが、餘り上流で珍重されぬ爲め、僅

かに花井お梅のヒステリー劇や、横濱の相中芝居
位ひで時偶に氣焔を吐いて居るのぢや張合無から
う、如何にも惜しいものだ。

三十二 三遊亭圓遊

ギボシの味もなめきつたり、成田小僧もお暇が出
たり、鼻をちぎって鐵瓶へ投げ込んでワツと来る
時代は去れり、もう足をたゝいて真打になる時で
無し、是に於てカステ、コの祖神も、講中集めて
一ト相談打たねばなるまゝ。

三十三 中村芝翫

故團菊の間へ遣入ッての振袖時代こそ、天下一品
優美の極など思ふたれ、軍扇とつての御大將と成
つては、御足元の危なさ心元無さ、併し御當人は
日本一の思召なるべし、左様さ明智光秀の足ヨヂ
などは成程日本一に相違無し。

三十四 むさし家嘉市

ふツくりとした風采、たらくてぼれる程愛嬌が

有る、血の走る程元氣の満ちた、何處と無く嚴たる此人獨有の地節、浪花節としては先ヅく上品な方、何んだか褒めてやりたい男。

三十五 ジョンペール

ベストの如きもの也、榮久に續くものにあらず、豫防さへ怠らねば夫れで宜し、コヲヨ石灰は買つてあるかッ。

三十六 一立齋文車

月並の俳句は旨いと云ふ、成程さうらしい、しなびた洒落た賑やかな老爺さん、實は下情視察の爲め水戸の西山光圀公が假に講釋師と身をやつして居るわけでも何んでも無し、戯言は兎に角此人の繩切は釋界の一品。

三十七 竹本朝重

タレ義太の下手糞なのが、朝太夫張の浮ッ調子で眞打でムるは度胸が宜し、なんだとえ朝太夫を張る處が賣物ですわかヒエーだ。

三十八 中村又五郎

白の抑揚に頻りに骨を折るだけ、さすが功あつて先づ青俳中吉右衛門に次ぐの上手と云ふべく、凡ての呼吸は時藏二分故寺島四分御當人四分びて十分に見せる大派出な藝風、唯一寸御注文申て置きたいは、上眼と顔の稲光りと、景況に依つて舞臺を急行で走ること此三ッを廢めて欲しい、頼むよ猿屋のおふくろ。

三十九 桂 文樂

馬樂の千枝時代傳枝と云つた宜い棒組、江戸ツ子のナヤキ、神田市場の可愛がられ、馬樂程の奇行は無いが、話口と云い、音曲と云い中々に捨て難い茶味が有つて、踊りは又わざやかなもの、而して真打がった不疊見の無いのが何より嬉れし是れ等をこそ話し家の粹と思ふが、人はさまざまに買はざるべし。

四十 兒島文衛

夏小袖のお染を初めて演じた時が、彼の技藝の頂上で、夫れから段々下り坂、八百藏に盃をもらつて市川八百枝、それも、居寝むりの一興行、またもどりの今度は水野の奥仲間へ道入ッて首ふりの、さて此頃はナト草臥れて來た本郷座でいゝ魔のふり。

四十一 芳村伊十郎

一本鬮子と無下に云ふ人も有るが、其丈夫にして朗々たる聲、大まかなる節まはし、勘進帳など、來ては恐らく天下一品。

四十二 揚名舎桃李

シンミリとさせぬ代りに面白く聞かせる、騒々しい代りに飽かせ無い、夜講の真打としては上乘の老釋師。

四十三 尾上松助

たツたひとり名人の取残され、ウム／＼／＼つま

らねえ世の中だナア。

四十四 柳川一蝶齋

巧みに花やかに而して品好く、實に御座敷藝の上乗なるもの、口上言ひの若造も追々垢ぬけがしてホウカイなどやつても高座を下品にしないのは感心。

四十五 松旭齋天一

壯俳の音さんと好い對手、其吹き方、其興行振

儘かに藝界の傑物、見識も先づ有り、如才も無し書も能くし、詩吟に長ず、奇術以外に又奇術のある處えらい哉。

四十六 中村芝鶴

瓦斯線の團藏、但し夫れも此頃光る絲が抜けて來た古着市場のローズもの、新富町の太夫元ぢやア大へこみだッたらう。

四十七 木下吉之助

愚痴女形の名人、今少し發展する處が無いと舞臺

以外いざいに愚痴ぐちらねばなるまいせ、まさか琵琶歌ひばうた斗たり
は一生しやうかつぎ廻まはるわけにやアゆくまいから。

四十八 入舟亭扇橋

故川崎屋こかはさきやの聲色こゑいろで眞打しんうちになつたは凄まじ、眞打しんうちに
成つて以て以後いごは小松嵐こまつあらしで大道具おほ道具、都新聞みやとしんぶん様々さまざま。

四十九 一龍齋貞輔

小粒こつぶでヒリ、とした出来星できほしで無い中坐讀みちゆうざよみ、確しつり
したもの、無駄むだを言はず愛嬌あいけうの有ある、儘たしかに信用しんよう

の出来る男で出来るおとこ。

五十 橘家圓喬

今更いまさららに喋々てぶくもくだ、既にすでに上手じやうずを脱だつしかけて、名
人じんに成なりかけて居をる人ひと、まだ圓朝えんてうをつかぬ處ところが衰は
めてよしだが、どうしたものか樂屋がくやに於おける此人このひと
の不評判ふひやうばん、手てがつけられ無い馬鹿ばかだとネ、妙めうだナ
ア。

五十一 中村獅磨右衛門

への字じなりの口元くちもと、キヨロリとした眼め、ボツテリ

とした頬、張出したチデコ、ドスの利いた甘い調子、實に先天的の半道役者、是で達者にまかせるのを廢めれば、自然と臭味も抜けて來やうし、而して年齢が重なりや夫れ丈けつ、枯れてもくるだらうし、愈々そうなれば断太郎梅助の後釜に心配無し。

五十二 三遊亭福遊三

薄ぎたない、肥った、熱苦るしい、見た斗りでくだらなさうな、聞いたら愈々くだらない男、財産

は左樂の聲色たつた一ツ、御自慢は一名「喧嘩」と稱する川上 左樂 ブラックの愚にもつかぬ掛合、義理にも聞かれたものに非らず、夫れでも御最負は有難いもので、偶には喝采をする御方が有る、聞く此頃この男、柳の左樂にひざまづいて枝太郎となつて顯らはれるとか、顯らはれぬとか、何もさうのしかゝつて怪しい藝を振廻はさんでも、動物園に明いてる箱がいくらも有りさうなものだに。

五十三 邑井吉右衛門

惣じて青年藝人は、生意氣と技藝とが足を並らべて走るもので、技藝若し生意氣に一步越せば所謂慥かな側の人となるのなれど、夫れに反して生意氣技藝に一步越せば、モウ取返しがつきつて無し此人の今日實に其間髪を入れずと云ふ場合、柄は悪るかツたが、故操が七五調の美的講談、立派にうけついで呉れ給へ頼む。

元

五十四 柳家小三治

慥かにものになると久しく存じ居候處、慥かにものにならぬと此頃決定いたし候、藝が段々あつさりを致し候を、言ふことはしきりと理窟立ち参り候て他分御當人はいよくえらく成つた様な氣の致し候こと、御察し申上候夫れだけ聞く方の身は随分つまら無く候。

五十五 藤澤淺二郎

随分何か仕出來すことの御さらいなこと、慥かに

元

生きて御出のことゝは承知致し居候へ共、夫れでも時折或は先生は死むだのぢや無かつたかなと思はれ候、誰が名づけしにや秀頼とは筈め得て妙と存じ候、大阪より淀君御乗込み以來別にこれと云ふものゝしき事件も起らず追々本郷城の威勢靜かに相成候こと、結構とも心細いとも存じ上候、何は兎に角御自愛專一に祈り上候。

五十六 市川左團次

先代が名人と云ふ程のもので無之候故、儘かに此

人は申分無き二代目と存じ候、御家の藝たる九橋の立廻りにも別段の御怪我も無く、又血達摩にもどこもやけど一つあそばさず、無事ニ々興行御片付ケの上愈々劇道視察として御出發なされ、今頃はモウ精々亞米利加子とおなりあそばしてのことなるべく、御毘も大分延びたこと、御推察申候茲に鳥渡御願ひ申置候は照焼をソースで食ふ様な名人となつておかへりなさらぬ様其事に候、時に親友川上君との御厚情は如何な工合に候や伺ひ上候。

五十七 正流齋南窓

天下の識者、天下のへたッ糞、正流齋の大入道、熊と八は先生の字學に通曉るさを頻りと感服して居り升。

五十八 柳家小さん

先代の様に能辯で無いだけ夫れ丈け名人なので有る、實に此人今日の成功は、彼の天災に於ける八公が吐々たる一呼吸が即ち其土壘となつたので有る。

併し當時の如く折紙附きとなつては夫れ程に恐れ入り切れず。

五十九 市川八百藏

音羽屋に逝かれた松助程に哀れでは無いが、團十郎に逝かれた彼れは慥かに活歴のスヤシものとなつた、井の竹さんも木挽町を去るし、さて是れから何んと召さる。

六十 竹本祖太夫

堅い、真面目な、濫い、けれども癖が有る、殊に

其言葉に於て、如何にも物を喰ひ乍ら口を利く様に聞こゆるのと、今一呼吸考へてもらい度いのは酔ッばらひのケープ、併し夫れとて決してまづいと云ふのでは無い、餘り旨いに過ぎた結果が、聞いて居て氣になるので有る。

六十一 大和家寶樂

すつきりとして厭味の無い、圖抜けて呑氣な調子ヒヨロリと脊の高いのがめッばう可笑く、義太夫は元より長唄も上手、三味線も達者、大阪俄とし

て慥かに江戸前のもので有る。

六十二 中野信近

新派の梅雀、七軒町の座頭、剛氣に賣込むもの。

六十三 松永和楓

一時名聲赫々たりし唄ひ手も、一度泥濘へ轉ろげ込んでからはからも意氣地無し、其聲の段々氣味が悪るく成るなど心細し、何んの今更ら惜しくも無し。

六十四 三遊亭小遊三

話もする、唄も謡ふ、踊りもやる、物真似も出来る、三味線も引く、茶番もやる、然り而してみんなまづい、賣物の公園面の説明、でも宜く御客が聞いて居るよネエ、まだしるこやを注文する御客さへ有るからナ、ウム小遊三まだ氣丈夫だ。

六十五 清草舎英昌

眞面目に枯れた讀み口、難を云へば少しく氣障な

ぬ。點、餅しテモ釋の與太眞打と一所にしてはならぬ。

六十六 市川高麗藏

兎に角勸進帳には成功せり矣サ、开處で紀念スタンプは出来るしネ、どこかまだお坊ツちやん氣が有る處が嬉しいヨ、でも、う東吾や高濱は演ら無い事にしたかい、そらだヨそれがいゝよ。

六十七 昇龍齋貞丈

艶情雅味津々たる讀み口、柔かくフヤケず、聞か

せ所ところが自然しぜんに締しまつて來きたのは若わかいにしして能よく熟じよくしたものだ、青年せいねん釋しやく師し中ちゆう選せんり拔ぬきと云いべし、もう斯かうなると益ます々く旨なまくなる斗ばかりだと立りう派ぱに保ほ證しょうする。

六十八 春風亭柳朝

重おもッくるしい口調くつてう、ハギレのしない滅めい入いる様やうな話はなし口くち、一體たいいぜんたい全體ぜんたいどう云いふわけで此人このひとが大おほ看かん板ばんでムこいまししようネ、ヤレレ此頃このころ若返わかがえつて芝居話しばいばなしときた有難ありがた過ぎて涙なみだが滾こぼれる。

六十九 柴田善太郎

ギススくした味あじも可お笑かし味みも無ない、成程なるほど川上かわかみの名なづけたと云いふ馬丁ばてい役者やくしやに相違そうい無なし、ナニ立廻たちまはりがむまいつて、一寸御斷ちよつとおことほり申し升ますが、モウ壯士そうし芝居しばいは正せい劇げきと名前なまえが變かりました。

七十 市川九女八

此人このひと若いし今廿年いまねんも若わかかりせば……と唯何たひなんと無なく爾思しかりふ、燕えん嬢じやうに腕うでをかして女優じゆう學校がくとうで御骨おほねを折をる

やら、鬼太郎芝居へも御手傳ひにまかるやら、壽座へも出ねばならず、わゝ、老い先き知れた身を、何んの因果でさう働らかなねはならぬのやら、貧棒故か、死懲故か。

七十一 三遊亭小傳遊

本家の鼻さへ曲つて来た今日、汝等小僧ツ子のウソデレが、ヨイシヨなんかんと怪し氣な手つきをして嬉れしがつて居ると駄目だせ、些男らしくしろヨ、三福の物真似などを得意にして居ると今

に貴様も氣が違ふぞ。

七十二 猫遊軒伯知

此先生時折文學物を擔ぎ出して、金色夜叉なんかを演るは剛氣とも剛氣なものだが、貫一の性格が不得要領に了るなどは、いやしくも當時大家たる、其有名なる髭の手前面目無からうに。

七十三 石田信夫

ぼけたりく。

七十四 かつほれ金丸

梅八一座の剛の者、何んでも喰ふからブタの金丸と云ふ、馬樂の滋味をぬいて常識を缺いた香天氣藝人、キビく馬鹿氣た野郎。

七十五 雷門助平

此座男に對して、旨いまづいは別問題だ、唯其とほけすました珍な面と、眞に苦勞の無さ相な呑氣な調子とを以て、僕は面白がってやる。

七十六 深澤恒造

慥かに上手の側の人だに、惜しい哉肥満り過ぎた子、折角眞面目なものをやつても、締りがつかず、可笑味に陥つて氣の毒千萬。

七十七 西尾麟慶

艶が有つて威勢が有る、柄が氣障な割合に演り口に厭味の無いのは、即ち上手な故で有る、是れで滋味が出ればモウしめたものだが、併し此頃しき

りこころえがと心得顔で、小説本しょうせつほんから拾ひろひ出したらしい、當世とうせい新熟語しんじゆくごを振廻よりまし立て、えらがつて居るはみツとも無し。

七十八 市川新十郎

團門だんもんの腕達者うでたつしや、濫しよい相中あいちゆう、當時かほし顔師かほしでは一とやら、只元氣げんきの無いを遺憾いかんとする、偶々たま元氣げんきを出したかと思おもは雁阿彌丈がんあみやうの演やつた後あとで公平問答こうへいもんどうなどは困こまるぢやア無ないか、ぼんやりして居るからおかしな奴やつの對手あいてに彌陀六みたろくを演やらせられたりするんだぜ。

七十九 三遊亭圓右

故圓朝こゑんちゆうの呼吸こきゅうに故柳櫻こりゆうやうの調子ちゆうしが有あつて、其間そのまから己おのれの技わざが發育はついくをしたと云ふ工合ぐあひ、ものが靜しづかで、すべてが自然しぜんで、所謂いはゆる垢あかのぬけきつたもの、彼の押おしくらの江戸えどッ子がタンカタンカの切きれ、三枚起證さんまいきしやうの凸でこ山やまがシリ上ありの田舎調いなかちやう、旨うまいもんだネ、僕は名人ゆいじんと云つて過言くわごんで無いと思ふ。

八十 井上正夫

村田門下むらたもんかで師しより以上の望のぞみを屬ぞくすドラマ役者やくしや、

唯些ナマリが強過ぎる、併しナマリを抜くと折角の藝が軽くなる、さアその處が研究ものだ、何にしても伊井一座を抜けたのは人氣の上から言つても技藝の上から言つても大きな損

興

八十一 一立齋文慶

中年からの講釋師だけ夫れ丈け洒落た口調が却つて陳腐になら無い、時に依ると高座で大口を聞き過ぎることも有るが、併し中々に捨て難い讀み口、其特意の小平治の壽司屋ときたら旨いものだ、そ

れから白子屋丹波屋なども餘人に演れ無い妙が有る。

八十二 中村梅雀

柳盛座が梅雀か、梅雀が柳盛座か、俳優精力主義のお手本。

八十三 三遊亭圓左

情致から生み出す滑稽こそ即ち眞の滑稽で、其點に於て小さん以上のものが有る、亦名人と云ふべ

し。

八十四 河合武雄

モシ彼の技が立役としてあれだけの上手で有ったならと思ふ、女形は出世が早い丈け夫れ丈け出世はしても、扱て氣に入つた夫が無く、爲につまら無く後家様で終る様なことが多いからネ。

八十五 秦々齋桃葉

當時端物讀みの上手と云つたら、先づ此人の向ふ

に廻る先生は無いと云つて宜からう。

八十六 雷門助六

何が助六だ、イケ騒々しいがらくた咄し家奴、成田屋の聲色は息むで許り居りやア宜いと思つて居るのかチヨツ………つがもねえ。

八十七 福島 清

伊井一座の座員福島清、たゞ夫れ丈けの事。

八十八 澤村訥升

高麗の辨慶に義經をして不評だつたなどはコレサ
什ふしたものだ、一體君は將來どふしやうと言ふ
の、ナニ夫れだから口を曲げてスウ〜云つて考
へて居るのか、さうか。

八十九 伊藤痴遊

豪放にして餘情あり、雄辯にして洒落也、彼の便
々たる腹を揺りつゝ、半日に渡る長廣舌に三百の聽

衆を一人たゝせぬ腕前は、實に感服の外は無い、
新派講談の開祖、大家と云ふべし。

九十 安樂齋梅八

公園の名物わたま、垢のねけ切つた洒落のめした
坊主、併し什ふも大道式の調子が抜けぬのは困る、
尤も其調子がぬけたら梅坊主差引残りたゞの茶番
師、何にしても追々寄る年齢の故か元氣の少し衰
へたは是非も無し。

九十一 鶴家團十郎

枯れそくなつた、重苦しい俄師、可笑くも何んとも無し、是れが阪地では寶樂より以上の人氣だとか、イヤハヤ。

三

九十二 市川團藏

仁木の刃傷その花道の出に於て日本一也、佛光寺の光善その祈りに於て日本一也、凄味の名人と云ふべし。

九十三 尾上蟹十郎

おそろく此くらひ人の騒がぬ役者もたんと無し、

大家様に門番は此人の家のものとも云ふなるべし、偶には甲羅に似せて穴でも掘るがいゝ。

九十四 山本嘉一

ドタ／＼と動いてガア／＼と怒鳴つて、正劇派の名題格とはなりにけり、剛氣だ／＼、斯うなつたら愈々奮發して怒鳴るがいゝ。

九十五 角藤定憲

面のまづい藝のまづいぶざまな男、炭焼もひまに

三

なツたから山から出て役者に成ツたか、併し壯士
俳優の元祖としては成程！

畚

九十六 竹本昇太夫

日の本昇太夫で大當てに當て、軍服拵へで北廓
へくり込みの、衣紋坂のおまわりさんが敬禮をし
たと云ふ立派な體格、語り口はたゞ朗々たる美音
だけのもの、聞きごたへの無い代りに肩のはらぬ
義太夫也、こけ威しのチヨボなどには持つてこそ。

九十七 正流齋鶴窓

師匠南窓張りの悪い癖がとんだ悪落となる改めな
くツちや可けん、師ヨリ以上の確りした腹の有る
讀み口で有り乍ら、爲に講釋がくだら無く聞てへ
て損。

畚

九十八 柳家小せん

研究會の前座、將來有望と目されて追々鼻もちが
なら無くなる、いやに生ツた調子で能く饒舌る斗
り、到底味の出る藝風で無い、得意のハイカラた
らちめなど、まことに困り者なり。

畚

九十九 川上貞奴

藝者が山師の女房となり、利かぬ氣から俳優もす
ると云ふだけのもの、藝はマダム貞奴さ。

百 歸天齋小正一

四五年前惜しい事をした故小圓遊の盛ん時代其五
人高座の剛の者、數寄屋町の色男、血廻しの正右
一名花筏と來ては艶福家として有名なものヨイシ
ヨ、ところで先頃改めて小正一、空中の時計やら
何やら大分手品の數も殖へて氣焰萬丈、夫れでツ

矣

ナギには落語もやれば、茶番も演ると云ふめちや
達者、黒い貌テラツカせて、眼を細くしたり口を
結むで見たり、氣障なんだか罪が無んだか、マア
何んにしても當時三遊での濡事師とゴライ升。

百一 市村羽左衛門

いつぞやの骨皮戸の助六では正に失敗で氣の毒だ
ツたが、師走芝居の松王などは慥かに一品呼はり
が、出来るものだった、何は兎に角今日の丈は竹
松時代のボンヤリはもうすツかり消えて、家桶時

矣

代の向ふ不見でも無くなり、生世話では先づ當時
一の指、唯どうも白の締り悪るきが疵、と云ふも
の、彼のボンヤリ竹松が今日斯くの如き役者とな
つたかと思ふも實に不思議に感ずる位い、成程大
器は晩成だわへ。

六

百二 寶井馬琴

馬琴天狗も、評判の空威張は寧ろ罪が無いが、併
し此先生鳴り立てた腕の割合に讀み口の順序が悪
い様なのと、品位と云ふものが、皆無なのは遺憾

とするだが忠治の赤城山の首實驗などは此人で無
くてはならぬ呼吸が有る、けれどいらも金襖へは
もつてゆかれぬ。

百三 市川紅若

小芝居で力むで居る割合に臭味の無いのは三河屋
畑の故で有らう、小芝居で力むで居る割合に舞臺
の淋しいのは夫れも三河屋畑の故で有らう。

百四 桃木吉之助

桂庵式悪婆とくるとおそろく新派俳優中第一で有

六

さ
らう、張合の無い役割だが真に旨いものだ、其代
り他の役を演ても其婆ア調がついて廻る爲め感心
をしそこなふ、とはさてせまい藝風かな。

百五 松尾 龍

影で三味線を引かせてテーブルへ向つて立身で語
るのは新らしがってぶち破したり、支那人の片言
交りの戦争義太夫「おなた、それ、やる、宜らしい
……とツ」ヤツテンとさては實際心細くなるヨ。

百六 猫遊軒小伯知

師匠伯知の生那へ腐ったバタをつけて喰ふ様な講
釋、つまりらぬ所へ力を入れるナマリだくさんの悪
い讀み口、縁日の蓄音機屋などはもう少し垢がぬ
けて居るヨ。

百七 市川小團次

幕外へヒラは下ツて筆太に、此處十年相立候、小
書きに曰く、併しナイ高は矢張ナイ高に御座候

百八 橋ハンスデー

ランプを天窓へ乗せるだけのものだが、まったく
ヒヤ／＼させますヨ、併し何んにもかんにも是れ
一ツきりが賣物は心細し、與太公曰く其ランプの
灯りを尻で消せヤイ、成程夫れは面白し。

百九 立川談志

先代は釜掘りで賣った名物男、此男も又方に三遊
派での珍咄し家、随分物おどろきをしない處、馬

樂に負けぬ洒呆／＼だが、雅味の無い咄し口と、
可愛氣の無いので馬樂程にもてないわけ、併し此
男の壽限無などはサヨイと思切ツたものだせ。

百十 川上音次郎

世の定評は藝術家としてよりも策略家としての方
が勝ッて居る様だが、僕はまた藝としても感服す
る所が有ると思ふ、其九州なまりが情に利いて感
激して大いに泣くと云ふ様な役、或は痾瀉まぎれ
に罵倒して片ッ端しから蹴ッくり返すと云ふ様な

役ときては儘かに無類と云つて宜からう、とは云ふものゝあの、出ッ尻りの胸つき出しの、首振りくびりの鼻クン／＼は正に恐れ入る、時に先生せんせい近々きんじん役者を廢めて策師さくし一方になるとか、オ、こわいことく。

吉

百十一 一龍齋貞昌

口調の切れ目におかしく癖くせの有る、平凡へいへんで枯れた講釋こうしやく、あぶな氣けが無い事だけは請合うけあひ、併し得意たいていの佐野山さのやまなどはサヨイと味あじあはせる處ところが有る。

百十二 三遊亭しう雀

圓朝えんちょうの呼吸こきゅうでゆく旨い話口はなしぐちのだが、どう云ふものかユトリと云ふものがまるで無く、何處どこと無くいやく見ゆるは如何、折角せつかくあれだけの腕うでを持ち乍はなら……

百十三 竹本小清

男女おんなの太夫たふひツくるめて今東京いまとうきょうで義太夫ぎだふとして聞くべきもの此人このひとのみ、と思つて居るとそろ／＼下

吉

り坂の氣味。

百十四 富士松柴朝

眞ッ赤になつて顔をツき出して、三味線の胴をハ
サの尻でコツンと叩き、聲と節を息み出し、鼻す
ゝりをすると、客は旨いものだナアと感嘆す、其
邊一向僕には解せず。

百十五 入舟家米藏

先頃柳派へ歸り新参のがんもどきの桃枝、小さん

が小三治時代、新石町の晝席で、抑もく落語の
角力など、云ふものが起つた修行舞臺で同格式だ
つたが、星霜十餘年の今日の彼れとこれ、一方の
名聲赫々たるに、引代へて、酒と貧棒と元氣の無
いので、得難い上手をトボく然たる高座振、玄
めッばい落語家とはしてしまつたり。

百十六 志村松之助

東京へは餘り顔を見せぬが、地方廻りぢやア大い
に振つて居るげな、柴田のもう少しヒレの有る而

して臭い、抑揚の無い錆び聲の雄辯で、慥かに地
方廻りの座長として申分が無い。

百十七 桃川若燕

戦争歸りの勳章釋師、際物屋としてまづく手堅
い方と云つて置く、何してももう戦争話はやめた
らどうだ。

百十八 村田正雄

成程旨い、眞面目にしんみりとさせるい腕だ、

が併し無い様でどこにか少々臭味がムる、开處で
一寸御注意申が、君は決して御大將たる人では無
い、さらば野心は御無用、伊井の下にでも居れば
夫れこそ五萬三千石に過ぎた家老さ。

百十九 鏡味龜吉

岩てこの様に突込まず、眞面目で可笑味の有る演
り口、錆びた咽のめッばら意氣な聲、老味で垢ぬ
けのしたもの、僕はどうもこんな藝人が捨てられ
無い。

百二十 市川團八

木挽町の頭取さんとして久しい人、團門の太鼓持役者、名題に昇進して悦に入つて居るなどは頗る珍、其内に勸進帳でも演るがい。

百廿一 富士松ぎん蝶

穴のふさがつて居る鼻をグーグー鳴らして、忙はし無い騒々しい、イツも相變らぬ古いぎん蝶、これも斯界の名物として保存して置け、そこで一寸

合

百二十二 關 花助

注文するが、もう眼の欲しい都々一は廢す事也。

鳥渡買所も有る役者だに、矢ッ張りものになりそこねッ、有る！、ちッとも知ら無かつたが義眼だと聞く、マア舞臺で落さぬ様あばれ給へ。

百二十三 春風亭柳枝

根ッからつまら無い可笑無落語家となつた、褒めて云へばさらくとして宜しかね、此人儘かに

ハ

名人になれぬ上手止りの藝風。

三

百二十四 橘家圓三

お前は豪いヨ、藝者やの兄いさんだヨ、アイヨ分つてるヨ、聞けば水練が上手だとネ、何とか高座に利用できないものかネ、精々川上張で新機軸を出して見な。

百二十五 境 若狭

コメデーの意義を履き違えては居たが夏小袖の灰

吹屋は慥かに此人一代の當り役、其前役何をしてもまづいもの、隠し藝の新内の三味線は役者以上に旨So。

百二十六 松林右圓

圓鶴から魯山になつて何んだか少しまづくなつたと思つたら、先頃右圓となつて又まづ味を増した

百二十七 朝寝坊むらく

えらく旨さうで、極めてまづいの……

登

百二十八 一心亭辰雄

☆

其柔和な風采の中に何處にか一癖犯すべらざるもの有り、其語り出しにも故縁雨の美文などつかいたるは奥ゆかし、節に言葉に其情味津々として湧き出る處、今日の浪花節界に單り超然として群を抜けり。

百二十九 桂 殘月

此頃出來星の洋服咄し家の中で一寸好い呼吸の有る男、就中金洲九甲板上で御用商人の氣をもみ面

など中々に妙と云ふべし、其動作萬事も餘程味合あり。

百三十 木村 操

鑑かに女形には出來て居る人だが、張りが無いからまるきり駄目、ぢれツたい程意位地の無い役者、どうだい白の氣の無さ加減。

百三十一 三遊亭金馬

當時の落語界として第三流に位る腕達者だら

☆

う、併し言葉が下品に鼻へ抜ける悪い癖がある、
まだく上手とは云はれ無い、真打などは以て
の外。

百三十二 寶井琴窓

控へ目な様で乙ウ高慢臭い、落着が態とらしく、
爲に講釋の間がのびる様思はれる、何はさて心得
はあり、慥かに下手と云ふのぢや無いヨ。

百三十三 尾上菊五郎

氣性は慥かに亡父譲りらしいが、舞臺はまだいか

な事、いつぞや追善の辨天小僧から元氣づいて、
大分腕白に動き廻る様だが、しまつて置けばいゝ、
魚屋の茶碗を見せびらかしてヒヤをいらしたりな
ど、將來一大名優を捏つち上げる上に其方が好い
ものかどうかネ……。

百三十四 竹本越壽

イヨ一ハイカラのでこくお嬢、義太夫見た様
な事をやるネ、乙ウ口元をひねる處が嬉れしい、
どうするくブルくく

百三十五 古今亭今輔

先

あんまの小常こつねが小三治こさんじとなつて、黒い羽織はをぎの一本も引ッかける様になつたから、モウあんまでは無い按服あんぷくさんと云ふ格かくだなと思つて居る内、いッか今輔いますけと名乗なりのりを上げて大ピカ〜開處そこで針醫はりいさんと云ふ資格しきかくかネ、細ほそッコイあぶなッかしい聲こゑで「わたしの隣下となりに古着屋ふるぎやが御座ござる」位くらいで曰いはく音曲師おんぎょくしだと、ナニ咄はなしも中々なか／＼心得こころえて居るつてゴロメにお文おぶんさまかネ、フムンいやだ〜、斯こうなると別段べつだん感かん

百三十六 橘家橘之助

服ぶくもしなかつたが先代今輔せんたいいますけが戀こいしくなる、眼めは一ッだッたが意氣いきな藝人げいじんだッたッけ。
寄席音曲よせおんぎょくの大姉おほあねへ、唄うたい聲こゑも語る節ふしも高慢こうまんがブテ下さかッて居いて厭いやだ三府浮世節さんぷうよぶしを肩書かたがきの眞打しんうちは凄まじい、さう〜いつか彌三郎やみさぶろうの絲いとで長唄ながうたとおどかした事ことが有あつたッけネ、エ、何んだへ此人このひとのゴゼは聞き物きものだッて、ヘッそんな事を云ふから、上のぼせてしやうが無いのだ。

先

百三十七 市川女寅

名

有美先生の所謂日本一の女寅閣下だが、淋しいと、元氣の無いと、振はないと、女形品切の今日だのにネエ、實際演り物に依つては芝翫も及ばぬ妙が有るがナア、ネエ有美先生。

百三十八 ブラツク

色變り藝人の嚆矢、もう古いもんだ、だらしの無い音曲やヅツとする出たら目踊りで、前受けのワイク客で圖に乗って居るのぢや無い、飽くまで

人情話を研究して怠ら無いのは感心なものでゴマリヤス。

百三十九 常磐津千代香

淋しい油ツ氣の無いするくとした如何にも女の盲目らしい語り振、左様さ常磐津のメシガラかネ、後に至りまして詩吟入の米山は厭だネ。

百四十 木村周平

水野好美から六を引く、答へ何程なりや。

百四十一 名古屋三人女

壺

歌奈江はまづくなつた和楓を女の美しい聲でゆく工合、併し女の唄ひ手としてはしツかりとして厭味無き方、三味線の久吉小久共にあざやかなもの乍ら、掛聲の名古屋調に成るは恐れ入る、夫れに小久の高座で絲を切るとの名人なには驚く、時に此ぢう唄ひ手が代ッて小まんが洒呆くマヨくと構への吉原雀が聞いてあきれる。

百四十二 放牛舎桃林

故桃林の模倣、眼付き首振り力むだ調子はまるで生きてゐる様だが、由來動物標本は腹の中へ蕪もしくは綿が詰めてあるもので精氣は無いや、

百四十三 騎江亭芝樂

扱ひ悪い悪達者哉、不幸名譽の戦死も遂げず。

百四十四 大谷馬十

中洲で賣込ひで中洲で終る、松助と片市の間をゆく世話の上手を、アイツコ辨當の香の物で終りさ

壺

うなのは氣の毒千萬、其香の物も此頃日増しの出し置きとさた、哀れもう箸のつけてが無し。

百四十五 藤川岩之助

嘉一君ヨリは宜し、さりとして年中七むづかしい片づむだ面して、警部さんの様な人なり

百四十六 寶井琴凌

癖はあるが温順な、悪い講釋師ぢや無いヨと云ふだけのものサ。

百四十七 三遊亭遊三

長い手をニューと伸ばしたり、突ッ張ツたり遊三一流器械入仕方話し、アツヤラカナトセノキエーライス眞打。

百四十八 春錦亭柳櫻

如何に藝界が未なりとて、こんなものが柳櫻とは呆れましたり、驚きましたり、例令其遺子にもせよ、少しは身の程も知つてもらいたし、三遊ではまだ圓生さえ出来ぬでは無いか、イケづらくし

い青二才だ。

百四十九 尾上梅丸

骨ッポイ生つうのトンガリ女形、子供芝居時代は
ふつくらと可愛い、おツとりとした藝風だツたが
ネ、今はハヤ望み絶へたり。

百五十 市川猿之助

調子と容色が品位を缺いて居るので押出しでゆく
役ときては五割六割も損だが、何がさて當時での

腕役者もう、老練と呼ぶ方、踊りは先づ、上手で
もナイ高のは忌味なり、高麗のは未だ骨が有り、
艶は無けれど今日では此人が一なるべし。

百五十一 田邊大龍

咽にさはる様な音聲は氣になれど、流石老巧の中
座讀み、癖は有つても味は江戸前なり、錆びの有
る講釋、但し此人が何年と無く鬼神お松に取ッつ
かれて居るのは驚いたよ。

百五十二 春風亭枝雀

完

うるせえ、臭え、所謂通人の悪でげすと云ふ鹿振り、柳枝の弟子としては調子が違ふネ。

百五十三 五味國太郎

二枚目ともつかず、三枚目ともつかぬ唯達者な安ッポイ何んでも屋、俗に云ふ調法役者、一寸三味線も弾くしラツパ節の……

百五十四 養老瀧五郎

日本手品ぢやア好い名前なんだらうが、其抜い振の拙なとつたら、第一口上のネバツきから恐れる、先づ山の手の端か近在ものだネ、江戸向きの子供は承知しないヨ。

百五十五 壽家泰治ノ

梅坊主の座から抜けて若ててこが二人羽織の脇役者、かつばれ出身の割に下品で無いを宜しとす、但し一雨毎にボケます。

完

百五十六 一柳齋柳一

いづぞや評判の心中男、一柳をひつくり返して柳
一と改名、先代柳一の様に忌味が無いが宜し、唯
受付ケ然として皿とトランプで重い口をぬらして
行くノソツとした藝人、時に此頃記憶術と云ふ新
手を出して大氣焔は元氣よし。

百五十七 尾上菊三郎

平々凡々、されば無事な、團菊が死びでもナニ相
變らず歌舞伎座には出て居りますには相違無い役

者

百五十八 三遊亭金朝

随分秀れて不器用な話口、可笑い話をおかしくな
く話す處が餘人に出來無い處、素話一方が呆され
たもの也、おやぢは故高島屋の聲色で賣つたもん
だから、君も新左團次の聲色でも研究してやつて
見ちやアどうだい、何に馬鹿にしなさんな、そん
なんぢやア無いつてナール程。

百五十九 森 操

新派の鈍優に屬す。

百六十 松林伯圓

題を少しもちあげて、眼をパチ／＼やつて、堅い口調の際物読み、家康をえゝ康、明治を明せなどと云ふ處一寸得難からずやイヤ失敬、兎まれ角まれ読み口にケレンの無いのは慥かに貫目をつける。

百六十一 竹本文福

女義太の瓢金物、あまりさわぎちらすと臭くなる、何んと云つても女也、程にして呉れぬと男がなやまされます、ナニ騒ぐツたつて掛合の時計りだと當り前よ

百六十二 桂 小南

土臺が上方仕込の賑やかな藝なのだから其上を江戸式の粹をシツクリと研究してさらりと湯のしが出来上れば立派な真打に成れるだらう、得意の話

108
の中には野崎詣りなど、云ふ氣の利いたものもあり、踊りも上手な方だが柄が大か過ぎる爲妙味が無し、何してもあまり大ギヤ〜に演るとは改むべし、併し海晏寺の清玄と與三はお芝居として見れば面白し。

百六十三 三遊亭小圓朝

親類の話し上手位もの、聞き残しても惜しく無い真打、併し佃祭りなど一寸宜い所も有る、得意の世辭屋の世辭を一つ買つて賞めて上げやう。

百六十四 神田松鯉

神田祭りを洒落て松鯉と呼ぶのださう、日本大勝利をもちつて松鯉と呼ぶのださう、何んにして花々しい隠居名をつけて、老いたりと雖ども彌兵衛金丸中々元氣衰へずさ、だに依つてアハンツ蒙ら

百六十五 常磐津都太夫

上手なれど語り口まことに氣障也、併しお染の土

手場などは意氣で賑やかで、籠内からの語り出し
宜い心持なり。

百六十六 市川團升

八方八つもちりと宜く動く腕前、前名才三郎ぢや
ア本所深川で器械場の汽笛と共に鳴響いたもの、
ナイ高と訥子とを調合して日増しの姜荷を一キレ
入れ、一杯半を一杯に煎じた藝風、成程凡ならず、

百六十七 松廼家喜作

故圓生の前座を幾日かやツて鹿面白く無しと感じ

故平喜の弟子となつて狸と變じ、夫れが性に合つ
たかメキ／＼と賣出して當時吉原一番の流行太
鼓、大派山な座敷の取廻し、咽は褒めて云へば鏽
が有り、踊りはしツかりとして軽く、人のかゝア
何んとやら云ふ踊りは、慥かに俗客をヤンヤと云
はせるもの、併し金襖向きの舞間では決して無し、

百六十八 三遊亭遊左衛門

話はガチャ／＼とそれも罪が無く、無器用な手つ
きでステ、コもちりも可笑しく、おなじみの玉乗

りはスクズリを型にして、御覽に入れらるもの、唯
もう賑やかなくだら無い男、さアさ玉乗はこちら
で御座い入らハイ〜。

百六十九 澤村宗之助

小傳次存生中故人の松王に此丈の千代、あの頃は
實に望みを屬したヨ、少しヒネては居たが宜い役
者になるだらうと思つたに、其ヒネ丈けがもの
なり、夫れからヒネが氣を持つてもやしになつた
などは、新前の八百屋も一寸手が出ないネ。

百七十 神田小伯山

音聲と高座の構へが陰氣也、讀み口もまことに榮
へず、何處か故人になつた操で無い方の吉瓶の面
影が有る。

百七十一 松柳亭鶴枝

先代鶴枝の人形面にはとても及ばぬが、併し赤テ
ルか何かつかつてセリ上りの體は芝居なら大向ふ
大受け、踊踊りも先代よりは厭味だが御客はわけ

も無く大喝采、團子坂へ出掛けて懷中鏡を出して
人形の顔と己れの顔とを見くらべて大苦心の結果
高座へ上る其の熱心さ加減は馬鹿くしく感服す
る。

百七十二 中村蝶昇

鈍優として梅雀を向ふへ廻して西の關取、小粒で
枯れた達者なもの、當時深川座の師範役。

百七十三 華玉川

ナヨツ笑かしやアがらア、わけの解らねへ言をさ

えづりやアがつて、悪く刎ツ返へりやアがつて、
イケ八釜しいチャンく坊主だ、去年の秋の病ひ
に………フツ隅の方でドウスルくツてやつが有
る、馬鹿ッ。

百七十四 小金井芦洲

慥かに斯道の識者也、飽く迄も眞面目に長じたる
軍談讀みの先生、此人をこそ眞個に大家と呼ぶと
が出来る、ナニぢやア前に大家と云つたナア嘘か
だつて、イヤコレはく。

百七十五 中村秋孝

鳥渡の呼吸に實にたまらぬ妙味は有れど、何をしても軀の癖がほぞれぬ爲め、役に依つては全然敬服致し兼る事が有る、殊に品位の無いのが損、だが伊井一座では決して離すべからざる人。

百七十六 市川團吉

いづどや成田屋が木挽町で毛谷村を演じた時口上を言つて貰つた梨園の幸福者乍ら、何ぢやゝらそ

れ程の事も無い役者、其くせいやに達者なヒヨロ男。

百七十七 越後源次郎

水野好美一座の三枚目として決して動かすべからず。

百七十八 都々逸坊扇歌

先づく小さん馬樂文樂など僕の大好きを抜いては、大嫌ひ揃ひの柳派の中で褒めてやりたい藝人

だ、癖は有るとしても此頃での音曲師、話とて左
樂助六のさちがひ調子で無く、手堅い處もあり、
「稽古所」「欠伸の稽古」「半分垢」など捨て難いも
の、高座で膝のくづれる様なみだらな咄し家ぢや
無いのも嬉しい。

二四

百七十九 寶井琴柳

此頃流行時候の加減で出来上る真打の中で、殊に
駄目な方。

百八十 春風亭米枝

得意の故左團次の聲色もだんくまづくなり、話
はむかしからやれず、いつ迄ホンの御色取で暮す
ことかネ。

百八十一 三遊亭市馬

寧ろどぢやろかい、天窓を佛蘭西のおじぎ、菊石
一ツが千兩ならば、お槍のあたまはテンの皮と、
百年一日の如く此様な言を云つて居るきたない貌

二五

の、意氣な聲の、下等なれどナヨイと出来合に無い、音曲屋、其顔また保存して置いて價の出ること請合、大いに自愛したまへ。

百八十二 吉澤美之助

伊井一座のおよぎ出し時代、藤井若月篠塚と此男は四天王と云はれたものだが、先年若月等と共に脱走して北海道に一向得る處も無く、若月が藝者屋の御亭となつたを指をくわへて見て居るも口惜しく、此頃ひとりサメくと歸京して水野にひざ

まづきの公園の臭仲間へ飛込んで一段と役者を上げた瓢輕なのツそり男。

百八十三 猫遊軒若圓

昨今出来合ボチ／＼の眞打、其音聲が如何にも耳障りだ、併し夫れは天性故云ふが無理なるべし、マアどうでもいゝサ。

百八十四 都築文男

此人舞臺に苦勞と云ふことを覺へれば、慥かに一

一回毎に腕は上るべし、大いに請合ふ、振り給へ

二六

百八十五 有村謹吾

此頃當地に見えぬ様だが、江戸ッ子困らせの袖腕
蕪人、後ろ鉢巻日の丸の扇子で、向ふのキレ無い
米山を踊られて、義理でも無い御客様の大喝采、
オイヤイ。

百八十六 橘家小圓喬

名人に二代無しか、なまじ生々中故圓生に似た處

が有る丈けに泪の種。

百八十七 尾上菊四郎

是より名人へ何丁と云ふ道しるべを見て、小芝居
道へ引ッ返し、折角菊門の粹をだいなしにしての
けたり、噫！松助は其眼の玉と共に引込思案す、
此人は斯くの如しあゝ、もう道樂者の溜飲を下げ
る様な世話狂言は見られッて無し。

百八十八 太神樂ためる

是れ先天的太神樂の脇師、唯黙つて立つて居ても

二七

其からだに可笑味が湧いて居る、夫れが動き出して、饒舌り出したら、鬼神悪魔と雖ども、臍はどこへ行ッたと探すなるべし。

三〇

百八十九 市川桃吉

深川座などで工女的人氣に甘んじて、嬉れしがッて刎ね返ッて居ると、折角高麗藏門下の青優が鈍舞臺の小型の中の悪達者となッて取返しがつか無くなるヨ、今の内だ〜。

百九十 三遊亭圓樂

昔故人が盛んの頃小圓朝とか名乗を上げて、凄んだことも有ッたのださうだ、萬事結城紬でゆきてえなぞと、悪く心得すました利いた風なツナギ咄し家、老練と云へば老練。

百九十一 一龍齋貞橘

知る人ぞ知る貞山の前坐、たしか貞昌の倅だと思ふが、若いに似合はぬ活氣の無い、いつ迄立つても平凡なフツキレ無い讀み口、まさか一生前座で

三三

終る希望でも有るまいに、さりとは明治臭く無
いぐらたら青年では有る、如何に大器は晩成だと
てこれでは……。

百九十二 三遊亭圓治郎

上方出來のユトリの無いセキ込み調、随分古く
當地に居るが、ねツから變化をし無いいつ迄經つ
てもたゞ顔の光る計り、踊りも扇子遣いの紋彌小
南のチャンピオンが來たので、得意の松づくしも
相場をさげたり。

百九十三 山口定雄

評さば酷な事云はざるべからず、今日の彼は不具
者也、依つて氣の毒也、政岡が御殿場に於ける肱
まくりの怪演説から賣出して、都新聞の探偵實話
で大いに人氣を得、電氣仕掛で大當りにマア當て
、途中で怪我の夫れから段々逆境に沈み切つ
たが、今度は孝行娘のお定さんをまねぎにつかつ
て息を吹き返し、例の俗才を働かせて、矢ッ張マ
アくと山口一座と元氣宜し。

百九十四 桃川如燕

三

男前は宜し、風采は立派なり、さらば今日の大家たるの價値は充分也、讀み口は平凡の上乗なるものとても云ふべく、調子を張る時得意らしく含み聲にするは量見違ひ也、義士傳など相應にこなせど、骨髄かならず、滋味更らに無ければ吾等引つけられず、如燕とは些御名前が立派過ぎたり。

百九十五 岩井竹松

名人だつたがボケて小芝居廻りで終つた故松之助

の悪い癖丈けを器用に呑み込んで、可愛い、様で小憎らしい藝風、いづれは是れも小芝居役者で終るなるべし。

百九十六 松井源水

衣紋流しが、要止めが、ソリヤ練妙なものなれど、毎夜何回何年と無く演つて居るのだもの、恐れ入る事も無し、斯う云ふ藝は初めて見た時に限る。

百九十七 春風亭柳條

粘れて達者で面白けれど、軽いに過ぎて旨味が不

三

足、是も矢ッ張先代柳條の口を曲げて虎を殴り殺す方が今思ふと價値が有る。

三三

百九十八 阪東家壽之助

内職で蓄めた金は宿六の寢酒にでもすることか、みんな柳盛の家壽之助を見に行くのさ、即ち蛇口會議の名優なり、チツと蛇口會議とは井戸端會議の改稱なり、藝の旨いまづいは其長家の劇通女史に聞け。

百九十九 尾上梅幸

脊への高いのは切つてつめるわけにもゆかぬ故是非も無し、舞詞に今少し締りが欲し、兎こふ云ふもの、先ッ今日での世話女房、大歌舞伎の立女形には相違無し。

二百 一立齋文山

大いに學者顔の、ひとりで堅がッて居る、からッ下手の老釋師。

三三

二百一 尾上幸之助

折角ふっくりと出来懸った好い息子を、矢ッ張り小芝居廻りの悪い臭いを泌み込ませて、白まで幸藏其儘の舌を叩いてスウ〜いふ工合はエ、マア何の因果、親が悪いく。

二百二 川上秋月

上方製造新派落語家、洋服を着て卓に向つて、「悪い餓鬼やナはんまに」調ははんまに有難し、而してお題を頂戴して紋切形のコツツで宜い盃見で

ムるは愈々有難し、今に洋服の上へ赤い襦袢を着て踊るべしと也。

二百三 尾上榮三郎

坊ちやんと云ふものは役者の真似なんてえ不見識なことは廢し給へ、馬術の稽古それ〜、消防でッこそそれ〜、泣かすにおあそびが宜いのなり。

二百四 雷門金賀

唯ッワリ〜とした咄し家、音曲師として樂屋内

では上手との評判だが、僕には此人の音曲宜いとも悪いとも判らず、どうも活き〜としない唄い振りと計り感ず、ナトしつかりしるヨツとおどかしたらシヤツクリが止まるだらう。

二百五 田邊南龍

僕は知らねど先代南龍とは一ト頃釋界で鳴らした名物男、スタ、ノン〜と故音羽屋が舞臺で演つた程の人氣者だといふに、今度の南龍は誰れがなつたかと聞けば、鏡水改め正夫が戦争から歸ッ

ての武者振りなりけり、ギヤフン。

二百六 中村福之助

男振も宜し、押出しも宜し、腕前は慥か也、たゞ當地になじみ慥々故人氣は無けれど、紙治の様なデシ物を宜ふこなして、亦ホトトギスの如き新物が、そこから透りの正劇屋さんヨリ旨い、但し上方ッ子だけに臭味はどうかれ無い所それは是非無し。

二百七 倭露吞

實際物講談の大拙づ、よく黄色い聲といふのはあれど此先生のは鼠色の聲だから心細い、もう戦争も済んだのだから電車の旗でも振つたら宜からう

二百八 福井茂兵衛

江戸ツ子で臭味の有る、タンカの切れる癖にどこにか忌味の有る、併しおそろく役に毒だての無い何んでも演りこなす、ナンバをかくして其達者なことに、开處で此人の藝風を新派の舊俳優といふ。

二百九 市川猿之丞

當時宮戸座の賣ツ子花形の働き手、もう今日では柳盛座の鶴丸時代、子守議會の問題役者で有った事は誰れも忘れて居る、さアこれながらが土臺拵へだ、ボラ藝になつた源之などを見習ふなよ。

二百十 橘家圓左衛門

故圓太郎存生中から精々圓太郎張で、誰れが何んと云つたつて跡継ぎは己れさと單り決めて居たらしいが、突如と大坂から圓太郎が出来上つて来て、

そんな筈では無かったが、古い白、開處でからくり都々一もハツクシヨイもラツパもすツかりと氣が抜けて、氣の毒と云へば氣の毒、エ、ハツクンヨイツ、風邪引くなヨツ。

二百十一 邑井 一

なんどりと靜かに行届いた、やわらかい眞綿講釋、藝界ヒツくるめて一二の名人

二百十二 女道樂連

女だてらに有らう事か有るまい事か、東京女道

樂連とは何事だ、決して憎れ口は聞きたく無い、新らしく出た藝人だ、殊に女藝人だ、提灯を持つてもやりたいが、若し提灯つけて明るくしたら、泥回でさんく汚した小袖の點が顯れて、かえつて面目玉を踏つぶしはせまいか、他に名乗様も有らうに、名を聞いてさえ苦々しい噫女道樂、羽根助と云ふを筆頭にべて三人、あだ美しい、あだ氣味の悪いのが並んで、御座附の三下りの、のろけツこの、振事の、随分膽のすわツた調子で悪ツ刎ね、眞ん中へ坐ツたのは腹を立つた狐の如く、左

手にかまえたのは小ぎての利いた風のおなま、右
手に坐ったのは此中の大姉え、色の黒い生之際薄
い、物凄いの、いづれおとらぬ凡の凡たる藝、何
を賣物に如何な成行になり升にや。

三

二百十三 吉川清之助

關西節の短を捨て、關東節の長をとらんとする願
母しき人、やがて其調熟さは得難きの名節となら
ん、言葉の妙中々に凡ならず、慢する勿れ今一ト
呼吸ぞ。

二百十四 中村巖次郎

又五郎一座の悪達者、二枚目敵など格に入つたも
のなれど、場知らずのあくどい演り口、やたらに
樂屋落を振廻したり、箸にも棒にもかゝり兼ねし
る物。

二百十五 三遊亭遊雀

いやに本筋がッて却つて下品になる話口、此頃始
めた餘興の劍舞、太十とは思つきのつもり、左様
と字あまりに成つて抑揚に苦しむ邊りが先づ愛嬌

三

かき。

二百十六 清元菊之助

前業は左官の若親分、生れつきの粹が脱した土真
い裨天、當時黒縮のお羽織で樂屋入、中芝居の山
臺には目に立つ弾き振り、此ぢう投票新聞にいち
められの、大汗になつて夫れでもマア遊藝三傑の
端の方への當選者、此人三味線以外に御座敷が上
手、霞町邊りぢやア大鳴りに鳴つて居る男

二百十七 松本錦糸

三

蟹十郎を引のばした様な顔、白また何處かそれは
似て、上手なれど榮へぬ藝風、女優として淋しさ
演り口はえらい損。

二百十八 柳亭燕路

骨のまがった生意氣な老寄甲斐も無い話し口。ク
スグりに錆のあるのも珍なり、源の義ッちやん
も古いく。

二百十九 三田八改メ勘彌

勘彌の子は勘彌と云ふ洒落斗りでも有るまい、ま

三

アお目出度う、大丈夫阿兄には負ッて無しと請合ひ申、併し阿兄に勝つくらひの事では決してものになつたに非らず、勉強しろよく。

二百二十 旭堂立志

イヤ君は慥かにえらさうな講釋師だ、餘程學問が有りさうに見へる、併し演ることは随分つまら無し。

二百二十一 中村芝若

兒福でツボラを極めて、新派へ這入て小林新二郎。

再び舊へ戻つて目出度改名の芝若、又もや尻を曲げて新派へ飛込みの中洲で蹴られの其後足元定まらず、ヤレ〜水際立てだらしの無い役者が出来たもの。

二百二十二 小織桂一郎

カビ聲の情に利く好い呼吸の有る頼母しい藝風だが惜しいことに主人公になれ無い役者だ、其代り外國人とさちやア不思議な程旨いネ、はいてなこらつアいつそ外國へ行つて芝居をした方が宜いか

な。

二百二十三 中村芝三松

暫く見無いが今はどこで甘ッたれてクニヤツいて
居るネ、女形を通り越してナヤコに近いは名人だ
ネ。

二百二十四 服部谷川

トボケると櫛ぐられる様だし、眞面目になると可
笑くなるし、併し一ト頃は賣ッたもんだッけ。

二百二十五 雷門小助六

新らしい詰らぬくだら無い呼吸を生む處が、働
者のつもりなるべし、餘んまり榮へた話し口でも
なし、物真似は平凡、音曲は聞きにくひ聲。

二百二十六 地天齋貞一

大きなづう體にまかせてソツリくと扱いくひ
手品師、一ツ言を繰り返す愚にもつかぬ長口上、
例の瞞着帽子をひねくつて二王の見得などは珍妙

二百二十七 竹本小土佐

酷く婆アダレとなつたネ、鼻の障子のやぶけへ風のあたる様な聲、段々溢くならずにくすぶつて来るは甚だ心細し。

二百二十八 狂訓亭爲永

虚か實かは知らねど、梅曆の作者爲永春水の子だとやら、孫だとやら、或は弟子だとやら、飯焚だとやら、然るに依つて貞國を改め爲永と云ふ、狸の様な顔して豆腐の様な講釋、騒々しくなければ晝寝には宜し。

二百二十九 中村銀之助

風に加減で遠く微かに近かく黄色く、様々に聞ゆる白廻し、ヒヨロ／＼としたる御ン姿。

二百三十 高松琴哉

右同断也。

二百三十一 柳亭燕橋

眞面目な話し口なれどまだあぶな氣多し、夫れに黄色い聲を振立てるは腦に響くなり、併し高座に

熱心なることは儘かに認める。

二百三十二 竹本大島太夫

朝程のケレンは無けれど、矢ッ張り骨細く皮で閉
かせる義太夫、別段に凡を抜かず。

二百三十三 市川米花

口元がチト縮り悪るけれど、眼鼻立なら科白なら
亡高島屋其儘、イヨ一三崎町の女左團次。

二百三十四 高田 亘

只今の處たしかに神童、てんびん棒となつても丸
太ン棒となる勿れ。

二百三十五 橘家三好

久しく阪地へ洋行して大もて歸ッて来たから些
とは新らしい呼吸を聞かせるかと思えば、何ア
の「何かおやりやがれヨツ」「おやらうかチャク
ラチャラ」宵の口説が(中略)中直り夜が明けた
羽織く帽子くチャく「チャヤラ」と例の
如し。

二百三十六 神田伯鱗

一頁

得意き得意で新あらたらしい古ふる際きわ物を振よ廻まはすが、ほどけて結むすばらぬ紐ひも解とけ講こう談だん、第一だいいち風采ふうさいからがメラシが無なしすべてをもう少すこしキリ、ツとし給たまへ。

二百三十七 磯野平二郎

川上かはかみ派は出身しゆっしんの随ず分ぶん古ふるい壯さう俳はいだが、さて〜活くわ氣きの無ないこと、もうちツと生いきて居ゐる様やうなことをやれ相あなものぢやア無ないか、いつまで甘あまツたるい調てう子しでぐづ〜して居ゐるんだイ。

二百三十八 豆假名太夫

喰くひ物ものの加か減げんと小言こごととでいびり〜一しやう生けい惡あく命めいに稽古けいこさしたからわれだけに語かたるのさ、不ふ思し議ぎは無ない、旨うまくやれば旨うまくやる丈だけけいぢらしくツてたまらねえ。

二百三十九 中村明石

繪ゑは上じやう手てに書かくと聞きけど飯めし喰くふて行ゆくには困こん難なんなるべし、役やく者しやは下げ手てなれどどふやら飯めしを喰くふてゆけべし、併しかし藝げい人にんとしては誠まことに上じやう品ひんな男をとこ。

二百四十 大島伯鶴

先生當今は御氣焰も無いですか、イヤさらに無い
です。

二百四十一 市川千升

臭くツて舞臺に張の無い、其癖いやに達者な、苦
蟲がぬかるみへ落ちた様な面の婆ア優、これでも
昔は驚鳴かしたこともあるか。

二百四十二 橘家圓太郎

生え抜の江戸ツ子の上を上方へ行つて賑やかに油
を乗せて来た藝、こたえの有る音曲師、僕は先代
よりも宜しと云ふ、此人の「うどんや」は當時類の
無いもの。

二百四十三 市川三八

何處の芝居にも斯う云ふ人は無くてかなはぬ、穴
ふさぎの調法役者、殊に中洲の古い頭取、時々舞
臺で咽を聞かせるがサヨイとふるへつきます意氣
な聲。

二百四十四 竹本愛子

片づんだ筋張った語り口、婀娜ッポイ女振りを宜しとすか、どうも女義太は聞くよりも観るものなり。

二百四十五 三遊亭好三

遊三門下の古い男だが、唯もうひとりでよがった面を見ても溜飲のくる氣障な野郎、随分納りのつかぬセコ鹿だ。

二百四十六 實川延子

遙々と東へ下ッて中洲で敗軍の又五郎のチヨイ興行に顔を見せてあんまり振はず。張合の無いこと也、併し年齢は若し、男前は宜し、辛棒さへして居たら、まづ當り前の役者にはなれるだらう。

二百四十七 都家歌六

此男の面を水道の蛇口とは實に名評、不作法極まる話し口、どうも量見方が温順で無いらしい小生意氣でも、解らぬ氣な面ツつき、踊りは上手な

れど骨ツボイので趣きが無し。

一語

二百四十八 市川栗三郎

唯男振り斗り、歌舞伎座の並び武士、壽座の殿様、

二百四十九 三遊亭一圓遊

學校の先生から常磐津の太夫にもなり、手品遣ひにもなり、さて落語家になり、又此間の明治座の大切へ忽然と顯はれて「まぼろし」の林中張を聞かせると云ふ、へへへへんな可笑な藝人。

二百五十 眞龍齋貞鏡

達者のみにて味合無く、突込んでやる程聲が下品になる、さり乍ら骨の無いアヤフヤ講談には非らずと云つてやる。

二百五十一 三友亭紋彌

話口小南程騒はがしからず、若いにして、上方製にしては割合にコセツかず、締りも宜し、踊りは殊にあざやかなもの、就中其五もくなど最も妙、

三五

扇子遣いは巧みなれど僕は好まず、何しろ好いた
實の有る藝人だ、當分東京に尻を落着けて江戸式
粹を拾い出して行き給へ、何にしてもちよいとく
臭い戯談をやるを謹まなくツちやいけぬ。

二百五十二 市川猿十郎

當時立師として一二の人、容色と音調に品位無き
故片付けた役は詭が無理なれど、安敵とさては旨
いもの。

二百五十三 たにし

大阪俄の老武者、もうハヤ老る年の元氣は衰へた
れど、何分永年とぼけ込んだ腕前は大したもの、
彼のしなびたシャクんだ面で、マッ／＼とくだら
無い調子で笑はせまいことか、腹の皮をよらせま
いことか。

二百五十四 五明樓玉輔

山の無い話し口故、人を引つける處は無けれど、
平らかな調子で樂々と饒舌り立てる悪る騒ぎの無
い滑稽、飽きが來無いから剛氣、老練と云ふべし

「うそ八百」これが此人の賣出し話なり。

一六

二百五十五 市川荒次郎

毒にもならねば薬にもならぬ人、貫目が有つて貫目の無い藝、軽い役をすれば重くなり、重い役をすれば軽くなる、左團次も宜い叔父さんを持って幸福見た様なり。

二百五十六 大谷 新

髯を棄て卓を廢しユツタリと坐つてスツカリ高座

に箱ツた話し振、僅々一年と経ぬ間に、こんなにも旨く成るものか、だが併し調子の愈々小さん式になるは張る譯では有るまいが感心せず、何がさて愛嬌も有り元氣も出でたり、此分で、彼の意志で、努力又努力とやツたなら成功は眼の邊り也、たい演題は兎に角俗受を主として艶ポイのか、とぼけたのか、勇ましいのを宜しとする、カタカナ交りの日本氣の趣い物は情を引きつけずお互に張合抜けの興が乗らず、大甘で無てはいけまい。

一六

二百五十七 阪東三津五郎

若い踊り手の割に艶の無いのは損、科白も苦勞するのだらうがどうも引立たず、さア〜しツかり〜。

二百五十八 三遊亭新橋

舊式鑄型の中の音曲だが、錆び聲で情の有る都々一、即ち本筋の都々一、味ふて聞いて見給へ三好都々一のウワ〜などは譯が違ふヨ、併しもう衰へて來たから駄目だが。

二百五十九 桃川燕來

叩き込んだ慥かな腕、暴れ過ぎたツボラ辯、危氣の無い下品な老釋、場末の中坐讀みにはもツててい。

二百六十 阪東秀調

どう云ふもんだが秀調の様な氣がしない。

二百六十一 橘家萬橘

唯もう其嬉れし相な顔、呑氣な音曲振り、飛んだ

愛嬌者、金閣寺、さんざらさんなど太陽氣のシヤ
カ〜騒ぎ宵見世の客呼びに至極な男。

二百六十二 中村成若

故人阪彦と云ふ名優は千本櫻の八役を演分けたと
聞くが、此丈も又毒だての無い多方面、たい臭く
つてまづいだけの事さ、チャ〜。

二百六十三 中村翫太郎

天下一品折紙附の半道、夫れでいつぞや新富町で

伊左工門を演つた時、編笠とらねば故人の寺島を
ツくりとは、何んと素晴らしい心得たものでは有
るまらるか。

二百六十四 瀧川鯉橋

鼻の頭の赤い、お題を頂戴してイヨ出来ました大
津繪の古い清我、凡鹿の古物。

二百六十五 尾上芙蓉

改名して絶望と有る。

二百六十六 川崎猛夫

水野門下の臭才、ノツツリで悪達者のしかも近眼何んだつて此んな者に俳優の鑑札を下げたのだから。

二百六十七 三遊亭三玉

小遊三の實弟で、障子を叩いて汽車の真似するのと、指を鳴らしてハイエーッと天窓を叩いてさるんばをやるのと、脊蟲と座の真似の旨い、まことに慾の少しツカ無さ相な藝人、吾藝人の端しくれ。

二百六十八 鏡味幸太郎

曲藝の妙今さら云ふ迄も無し、男前と言ひ、押出しと云い實に立派な太神樂の親方。

二百六十九 青木千八郎

世紀おくれの壯俳、もう東京では直の出ぬ藝、兎に角一方の立者ながら。

二百七十 三遊亭福圓遊

子供が本でも稽古する様な話し口、聲色は大橋屋

にナイ高では買手が無く、人形は向ふ河岸の鶴枝に及ぶべくもあらず、遊人、い圓遊、小柳朝、遊圓治、など時候の變り目に名をかへる量見のしツかりしな相な男。

二百七十一 竹本鶴吉

女義太としては先づ上の部なるべけれど、底に活氣無く何處と無く淋し。

二百七十二 菊地武成

新派純帳の藤澤と云ふところなるべし。

二百七十三 大隈柳玉

立續けに息もつかず素人調子で無我に饒舌ツて、流行當時でさえ難有く無かつた時代遅れのオツペを賣物に、時折、恵智勝の二階から聞え相な詩を吟ずる處など結構な藝人と云ふべし。

二百七十四 壽家惠太郎

岩てこの高弟、四丁ナイフなど其得意、茶番はまだく青しく。

二百七十五 丸山 操

天

新派女形の二枚目として確かに遣へる、お暇のやれ無い仲働き役者、伊井さん大切にしておやり
ヨ。

二百七十六 澤村紀久八

何處やらに昔の色香惚ぼる、其舞ひ振りの情けある、さんざ苦勞の身の果を、二度の舞臺に返り花、露の干ぬ間に咲きし亂ぎく。

二百七十七 春風亭錦枝

よだれの出さうな口元は氣になれど、話口どこにか旨い處が有る、踊りは上手なれど氣障で締りか無し、芝居などさせると中々味をやる。

二百七十八 一睡軒花堂

度々聞いては難有い物に非らず、追分など先づ宜ろし、義太夫の佐和理の「こらしたなげさはあるまいものウ……ヒウヒツヒフ、ツフ、ハ、ハ、」など感心までには餘程の道程也。

二百七十九 竹本伊達太夫

これ程の太夫として高座に落着きの無きは性分か
知らねど損なり、鼻にカ、ル音聲悪るし、なまら
く、朝程に狂ふた上づりは無けれど矢ッ張り當
世向きの働き充分にて、眞の義太夫とは、どうも
ねへ。

二百八十 東 長治郎

柴笛つまら無い、劍舞の氣障なるは厭やなもの、

竹切りエィハツ、えらいッ、ウブツ。

二百八十一 倭 輝久雄

役者かえ此人はへエー。

二百八十二 市川九團次

否ぐだんじ。

二百八十三 春風亭年枝

先代年枝は儲か故燕枝の可愛がられで、ひとり俄
にあはたら經で程の宜い愛嬌者、ナヨイと名物だ